礎ishizue

三珠中学校校長室だより
令和７年１月１６日発行
Ｎｏ.３６
文責　校長　　渡邉　康裕
三珠中ＨＰはここから↓

校内書き初め大会

１月１４・１５日の両日、各学年の国語の授業の中で校内書き初め大会を行いました。「書き初め」とは、新年になって初めて毛筆で字を書く、日本の年中行事の一つです。

▼書き初めは、平安時代の宮中における「吉書の奏（きっしょのそう）」という行事が起源です。「吉書の奏」とは年始・改元・代始・政始・任始など新規の開始の際に天皇に文書を奏上する儀式のことを言います。この吉書の奏は鎌倉・室町時代にも引き継がれ、「吉書始め」という新年の儀礼行事として定着します。江戸時代になると、この吉書始めが庶民の間にも「おめでたい行事」として広まります。この吉書始めが今の書き初めとなったのです。

▼江戸時代、幕府で要職に就くための試験科目は「書」と「そろばん（計算）」の２科目のみで、字が上手なことは出世するために必要な教養だったと言えます。また、江戸時代の書き初めは、年が明けて最初に汲（く）んだ井戸水（この井戸水のことを「若水（わかみず）」と呼びます）を神前に供えた後、その水を使って墨をすり、恵方に向かって字を書くというスタイルが一般的だったと言います。

▼本来、書き初めは１月２日に行うのが一般的ですが、１月２日は当然冬休み中です。ということで、学校の書き初めは３学期が始まってひと段落ついたこの時期に行われます。どの学年の教室も「し～ん」と静まりかえる中、各自、集中して筆を走らせていました。▼峡南地区の書き初め大会の審査会は来週の火曜日に行われる予定です。校内の様子を見る限り、多くの人の入選・特選が期待できそうです。

負ける練習・失敗する練習をするのは今

みなさんは書家で詩人の相田みつをさんをご存知ですか。相田みつをさんの作品の中に「受身」という詩【相田みつを著「本気」（文化出版局刊）】があります。この詩は柔道の受身に焦点を当て、「転ぶ練習、負ける練習、人の前で無様に恥をさらす」ことが人の成長につながることを説いています。▼私は義務教育の９年間（高校へ進む人は高校３年間を加えた１２年間）は「負ける練習」、「失敗をする練習」をすべき期間だと考えています。特に、社会人としての基礎を培う中学生・高校生時代は、主体的に考え、動き、その中でたくさんの失敗をしても良い時期だと思います。▼中学校では学習や部活動、学校行事などを通して、より良く生きることを学んでいきます。そこでは主として、成功することや勝つこと、物事をより効率よく進めることなどを目指しています。それらはもちろん大切なことです。しかし、一生懸命に頑張って失敗することも、それと同じくらいに大切なことだと思います。失敗したときや負けたとき、次にどうすれば良いのかを考え、実行することが成長につながるからです。やり直しがきく、特に学校という守られた環境にいる今だからこそ経験してほしいと思います。▼先週の土曜日、ジュニアバレーボール大会が行われ、本校の男女がそれぞれ出場しました。

この日は男女ともグループ予選を行いました。女子は河口湖北中・玉幡中と、男子は石和中・御坂中とそれぞれ対戦し、残念ながら今大会での勝利は収めることはできませんでした。しかし、サーブやつなぎなど、随所に好プレーが見られ、良い「負ける練習」、「失敗する練習」ができたのではないかと思います。▼部活動に限らず、今、みなさんは、まさに負けても良い、失敗しても良い時期を過ごしています。大いに色々なことに挑戦し大いに失敗し、たくさん負けて、多くのことを学んでほしいと思います。真面目に精一杯努力して失敗する人を、私たちは全力で支えていきます。